

ドイツ史を基点として、
知的にもものを考える
楽しさを追求する。

Navigator

文学部/ドイツ語文学文化専攻

川喜田 敦子

准教授

Atsuko Kawakita

川喜田 敦子 (かわきた あつこ)

1974年10月26日、東京都生まれ。

1993年、東京都立戸山高校卒業。1997年、東京大学教養学部教養学科卒業。2002年、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程修了。大阪大学大学院言語文化研究科 准教授などを経て、2013年から現職。

日本と大きく異なる
敗戦国・ドイツの戦後処理

皆さんは日本が行った戦争と植民地支配の責任が中国・韓国との間でいまだに問題となっているのを知っているだろうか。川喜田先生が専門とするテーマの一つは、日本と同じ敗戦国ドイツの過去との取り組みだ。「ドイツとフランスの間では1950年代から、ポーランドとの間では70年代から(歴史教科書の記述を話し合う)『歴史教科書対話』が始まりました。同じ敗戦国でありながら日本とドイツが置かれた国際的な環境は違います。ドイツの最大の被害者はユダヤ人でした。ユダヤ人は国際的なネットワークをもち、とくに米国では政治的に大きな影響力があります。そこから大きな外圧が生じました。また、フランスとの関係では、西欧と政治的・経済的・軍事的な結びつきを強め、よい関係を保つための重圧がやはり高かったはずです。こうしたこともあって、ドイツはナチの過去と向き合わざるを得ませんでした」

同じ旧交戦国でも、東欧は事情が違った。先生は戦後行われた東欧からのドイツ系住民の引揚げも研究対象とする。「敗戦で失ったドイツ領から、人口の15%にも上る1,200万人が移動しましたが、これは日本の引揚げ者と比べると圧倒的に多く、統合は多くの障害を伴いました。一つは焦

土と化した国内で食糧も住居も不足していたことがあります。ドイツ系といえど、長年東欧で暮らしたため生活習慣や言語、宗教などが異なり、母国に溶け込みにくい人もいました。また、この問題ではポーランドなど東欧諸国の側が引揚げ者に略奪や暴行を行い、加害・被害の関係が逆転する事態も生じました。ドイツとポーランドの間にはいまだに感情的なしこりが残っています」

多様性のなかで共存できる
国と国の関係を求めて

ポーランドからの引揚げは、1945年に戦勝国が取り決めた「ポツダム協定」によって実施された。「領土が移ったら人間も動かし方がよい」という考え方に基づいて行われたのだが、この背景にあるのが「国民国家」という思想だ。川喜田先生は語る。

「国家は、言語・文化・歴史を共有する同じ民族が作るのが望ましく、一つの国に違う民族は住まない方がよい」という考えですが、そうした帰属意識があまりに強まると、国内の他民族に非寛容になるだけでなく、他国とも敵対的な関係に陥りやすくなります。他方で『もっと開かれた国際的な態度をとるべきだ』とは言っても、歴史のなかで培われた国民意識はそう簡単に手放せるものでもありません。

過去の民族対立をめぐっては、それぞれの国民国家にそれぞれの見方

があり、そのことがさらなる摩擦を生みます。では、全ての国が同じ見方をするようになればよいかと言えば、ある一つの見方だけが正しく、それ以外は正しくないという思想になるのもやはり望ましくありません。重要なのは、互いに相手を認め、配慮しながら自らの意見も持つ、多様性のなかで共存できる関係を築くことです。ここでは「一つのものを見る時には様々な見方があるよ。自分の見方はその一つではない」という発想が大事です。最後まで異なる部分は残りますが、それでも共存していくのです」

国と国の関係、それに基づく国民の意識をどう友好的に結びつけるかは難題だが、先生は歴史的視点から理想の姿を探る。



現代世界の諸問題とも密接に結びつくドイツの戦後処理。川喜田先生のインタビューは、日本と中国・韓国の関係にも及んだ。

**目指す研究テーマを究めるために
基礎から力を養っていく**

川喜田先生のゼミは、ドイツ語文学文化専攻のなかでは特殊な存在。専攻の中核である言語・文学・思想・文化などの研究に収まらない歴史・社会的・政治的関心をもつ学生を受け入れている。

「卒論のテーマもナチズムから環境問題まで幅広く、対象とする時代も必要な方法論も学生により大きく異なります。ただ、未来のあるべき姿に照らし、そこから導かれる倫理観に立って、過去と現在に対する自分のスタンスをいかに決めるかが原点になるのは同じです。そしてその倫理観は国際的に通用するものであってほしい。そんな資質を備えた国際人を育てたいと願っています」

ドイツはユダヤ人迫害の過去にいかに向き合ってきたかを中心に論じた川喜田先生の著書。



指すテーマを追究するために必要な力を挙げてもらった。

「まず対象を見る際に必要な概念の理解です。たとえば民主主義やナシヨナリズムといった物事を抽象的に捉える概念はほとんど欧米発なのです。そこで歴史・社会・政治等の分野でヨーロッパの知的枠組を知るための基本文献を講読します。ヨーロッパの知性に感受性のある人材が育てば日本社会のバランスがよくなる」と期待しています。

次に自分が必要とする方法論に関する基本文献を講読します。歴史学・社会学・政治学など、テーマに応じた必要な文献は変わります。3番目は自分が必要とする情報をドイツ語の情報源から得るための専門的なドイツ語運用能力の獲得です。そこではドイツ語が流暢に話せるというだけでなく、文献を分析的に読む力が必要になります。

こうした基礎があつてはじめて、自分が選んだテーマについて説得力のある議論が展開できるのです」

**バランスのとれた
見方を導きたすために**

研究の進め方はもちろんだが、学生に対する川喜田先生の眼差しも実にきめ細かい。

「面談やメールでの助言の機会を頻繁に設け、あまり長く一人で苦しませないように気をつけているつもりです。自己コントロールが苦手な学生、勉学以外の活動とのバランスが

とれていない学生とは一対一で話をします。そのなかで、進んで勉強したくなるような、自分が本当に関心のもてるテーマを一緒に見つけていくのです。研究史を踏まえたオーストリアのドックスなテーマはもちろん、ポップカルチャー、スポーツなど一見したところ学術的でなさそうなテーマであっても、それを学術的に研究するための方法をサポートするのが私の役目です」

そんな先生が授業の目的とするのは「知的にもの考えることを楽しめたいと思えること」だ。

「知ることが楽しいのはもちろん、分析することは楽しい。答えが出ない問題は多いのですが、それこそが考える価値のある問題です。そして、様々な考え方があることを知ったうえで、バランスのとれた自分なりの見方を作り上げるのです」

その目的は先生も同じなのだろうか。今後の目標を訊いた。「西ドイツにおける市民社会の形成、旧東ドイツの国際関係など、細かいテーマはいくつか温めています。大きく言えば、ドイツ史のテーマを他地域もしくはグローバルな歴史研究の関心はどう呼応させ、比較研究できるかを考えること、人間社会における歴史と政治の関係について考えを深めることなどです」

ドイツという国を基点に広がる学問の可能性。それは、皆さんにとっても全く同じだ。

2014年9月取材当時



“Close up,”

現在の研究テーマを教えてください

戦争賠償・補償、歴史教育などを通じた東西ドイツの「過去の克服」、「引揚げ」の国際比較など。

ご趣味は？

音楽活動は、合唱とピアノ演奏。手芸は、和紙工芸をしたり、編み物をしたり、気持ちの変化に応じて様々に。最近、しばらく連鶴を折っていました。ジグソーパズルに凝っていたこともあります。

どんな高校生でしたか？

比較的大人しかったです。合唱部の活動には熱心に取り組みました。今は高くとても出せないトッププラノを担当。運営をめぐる部内の衝突もありましたが、そうした経験を通して

かなり成長したと思います。勉強は好きで、とくに世界史の授業が楽しみでした。

高校生の頃の夢は？

母が小学校の教員でしたので、同じ職業を夢見ていました。学生の相手をするのが好きなのは、この頃の影響かもしれません。

お薦めの本を3冊あげてください

- 『歴史とは何か』 E・H・カー
「歴史」に対するとらえ方が一変しました。
- 『戦後ドイツ その知的歴史』 三島憲一
ドイツ地域研究という分野が成立するならば目指すべき方向だと思えます。
- 『国際歴史教科書対話 ヨーロッパにおける「過去」の再編』 近藤孝弘
研究テーマの決定で大きな影響を受けました。

先生にとっての“特別な一冊”は？

『歴史とは何か』 E・H・カー
読むたびに考えさせられる一冊。基礎演習でも必ず取り上げます。

高校生へメッセージ

部活動や生徒会活動はしっかりと経験しておきましょう。後でよかったと必ず思うはずですよ。また、文系・理系の区別にしばられず、全ての教科をしっかりと学びましょう。勉強することで、世界に自由につながる道が目の前に無数に拓けてくるはずですよ。



和紙工芸を趣味の一つとする先生は、連鶴にも凝る。



お薦めの3冊は、いずれも「歴史」を扱った内容。しかし、現代を見る目も開かれる。